

ブリ奇譚

ブリキ
相手

舞台中央に椅子が置いてある

客入れ
暗転

音楽
ブリキ、ロウソクを持って登場
椅子に座る

照明、ゆつくりと舞台全体
ブリキ、ロウソクの火を吹き消す

ブリキ 目が覚めたみたいだね。
こんにちは。

相手 ……こんにちは。
…

ブリキ えっと、ここは、どこですか。
ここがどこかです。

うん。
そうだな。

僕にはわからないな。

僕は、生まれてから、ずっとここにいる、ここ以外の場所を知らないから、
ここがどこなのか、僕にはわからないんだ。

だから、申し訳ないけど、君の質問には答えることができないんだ。

相手 ……

えっと

ブリキ ちなみに君は、どこから覚えている。

相手 どこから覚えていると言うと

ブリキ 僕はね、生まれたその日から、その瞬間から、覚えているよ。

僕はね、生まれた瞬間から僕だったんだ。

だから、僕はずっとここにいるけど、不安は無いんだ。

君はどこから、覚えている。

相手 えっと、僕は、…

そうだ。

僕は今日、酷く体調が悪くて、会社を早退したんです。

ブリキ そうか、君は今日、体調が悪かったのか。

それはどれ位悪かったんだい。

会社を早退する位の、体調の悪さつてのは、どの位なんだい。

相手 悪寒がして、仕事ができないくらい。

ブリキ 悪寒がすると、仕事はできないものなのかい。

相手 それは、度合いによりますけど、

ブリキ 悪寒がして、震えて、仕事にならないのかい。

相手 いや、それは、

ブリキ ああ、ごめんごめん、君の話はまだ終わって無かったね。

気になったら、聞きたくなる性質（たち）なんだ。

続けて、悪寒がして、会社を早退して、その後は、

相手 あ、はい。

会社を早退して、

ブリキ ああ、そうだ。

これだけ聞かせてくれる。

気になって君の話を続きを聞けそうにない。

相手 なんですか。

ブリキ 会社を早退する時に、周りの人の目は気になるものなのかい。

相手 それはもう、こう見えても、僕は、結構重要な仕事を任されてるんです。

そんな状況下で、早退するんだから、それは気になりますよ。

ブリキ そうか。

君は色々なことを気にしながら生きてるんだね。

相手 ……

ブリキ ああ、ごめんごめん。

続けて。

相手 あ、はい。

会社を早退して、ふらふらの状態で、電車に乗って、ふらふらの状態で、駅で降りて、僕のマンションまで歩いて、部屋に置いてある風薬を飲んで、ベッドに横になりました。

ブリキ ふ〜ん。

相手 ベッドに横になって、最初は寒くて眠れなかったんですが、少しして、薬が効いてきたのか、僕は、ぐっすり寝てしまいました。

ブリキ ふ〜ん。

それで。

相手 ……

そこまでですね。

僕の記憶にあるのは、そこまでです。

ブリキ じゃあ、ちょっと繰り返して良いかい。

自慢じゃないけど、僕は自分の記憶力に、まるで自信が無いんだ。

良くあるんだけど、勝手な解釈で記憶してしまつて、後で誤解を生んでしまつて、酷く怒

られることがあるんだ。

相手 はい。どうぞ。

ブリキ 君は、酷く体調が悪くて、会社を早退して、ふらふらで電車に乗り込んで、ふらふらのまま、君のマンションに辿り着いて、薬を飲んで寝た。
覚えてるのは、そこまで。

相手 そうです。
僕は、確かにベッドで寝ていたはずですが。
それなのに、何で、僕はここにいるんですか。

ブリキ 君が何でここにいるかなんて、僕には、分かるはずがないよ。
可能性としては、捕まったのかもしれないね。

相手 捕まる。
誰に。

ブリキ 誰に捕まったかなんて、僕にはわからないよ。
ここに来る人は、みんな、いつ捕まったかも、誰に捕まったかも、分からないんだから。

相手 ::
どういうことですか。

ブリキ どうもこうもないよ。
君は捕まるべくして、捕まったんだろうし、
捕まった以上、ずっとここで生きていくしかないんだから。

相手 ちょっと待ってください。
ずっとここで生きていくって、どういうことですか。
僕はもう、ここから出られないんですか。

ブリキ あまり興奮しない方が良いでしょう。
興奮すると、また、熱が上がって、激しい悪寒に襲われるよ。

相手 え。
あ、寒い。さっきまで何とも無かったのに。

ブリキ ほらね。
興奮したからだだよ。

相手 寒い。寒い。寒い。

ブリキ 寒いだろ。
心を落ち着かせて、もう一回眠りにつくと良いでしょう。
そうすれば、その悪寒も消えてなくなる。
まずは、心を落ち着かせて、眠ることだよ。

相手 はい。

ブリキ 心が落ち着いてくると、眠くなるだろ。

相手 はい。眠くなって来ました。

ブリキ まずは、ゆつくり寝ると良いでしょう。
話はそれからだよ。

相手 はい。

照明、ゆっくりと暗転

音楽

照明ゆっくりと舞台全体

ブリキ、相手の近くで見ている

相手が目を覚まし、軽く驚いて、後ずさりする

その後、平静を保ち

ブリキ おはよう。

気分はどう。

相手 : 大丈夫です。

ブリキ それは良かった。

君はもう、丸3日間も寝ていたんだよ。

相手 3日も。

仕事、どうしよう。

ブリキ 仕事なんて気にしなくて良いよ。

3日前にも言ったたる。

ずっとここで生きていくしかないんだつて。

相手 でも、

ブリキ でももぐちまも無いよ。

残念ながら、それはもう決まってしまったことなんだから。

相手 決まってしまったこと。

ブリキ あ、そうだ。

でももぐちまも無いの、ぐちまはどういうことなんだろう。

なんで、でもとぐちまを並べるんだろう。

相手 ああ、それは、ぐちまには、つまらないものとか、とるにたらないものつていう例えの使い方があるから。

まあ、どつちにしろ、文句を言うな的で良いと思うんだけど。

ブリキ へえ、君つて賢いんだね。

ぐちまには、つまらないとか、そういう意味もあるんだ。

ありがとう。

気になると、何でも口にして、聞いちゃうんだよね。

で、何の話をしてたんだつて。

相手 あ、そうだね。

えつと、

ブリキ そうだ。

お腹はすいてない。

君、ずっと寝てたから、ここに来てから、何も食べてないたる。

お腹はすいてない。

相手 そう言えば、
ブリキ 僕は君の世話係兼指導係なんだよ。
だから僕は、君の世話をしなければいけないし、指導もしなければいけない。
相手 ちよつと待つて。
どういふこと。
ブリキ そのままさ、君がここで生きていくにあたつて、僕は君が物質的に何不自由ないように世話をしなければいけないし
ここで生きていくにあたつての、非物質的なことに関する指導をするんだ。
相手 ちよつと待つて。
非物質的なことに関する指導つてどういふこと。
ブリキ 非物質的なことつてのは、分かりやすく言えば、
思想とか、哲学とか、信条とか、主義とか、そういうこと。
相手 何で、そういった自由なことを、指導されなければいけなんだ。
ブリキ 物質的には何不自由ないんだから、非物質的なことに関しては、服従するしかないだろ。
相手 そんなのおかしいよ。
誰もそんなこと望んでいないし。
ブリキ 望むにしろ、望まないにしろ、ここはそういう所なんだから、しょうがないだろ。
相手 しょうがないつて。
ブリキ 君は今まで、しょうがないつて思つて、何かを断念したことはないのかい。
相手 いや、それはあるけど、
ブリキ だろ。
だったら、今もそうなんだよ。
しょうがないんだよ。
相手 ∴
でも、断念する時にしても、色々と考えて、実行して、その上で、しょうがないつて断念してきたんだ。
そういうことを、今は何もしてないだろ。
ただ諦めろつて。
ブリキ そうだね。
君は立派な人間だつたんだね。
確かに、色々考えて、試してみても、その上で断念したほうが、諦めもつくよね。
でもね、
だからこそ、ここでは、そういう悔しさだつたり、絶望だつたり、君が辛い目に合わない
ように、指導していくんだよ。
相手 ∴
ブリキ ちなみに、僕だつて、できるだけ指導はしたくないんだ。
相手 どういふこと。
ブリキ 指導をするときは、僕も痛みを感じるからさ。
相手 痛みを感じるつて。
指導つてのは、どういふことをするんだい。

ブリキ 指導は、極々簡単なことだよ。
さつきも言ったように、ここでは、思想だつたり、主義だつたり、そつらう、考えることは必要ない。だって、物質的には何不自由ないんだから。
だから、何かを考えたり、何かに囚われたりしたら、僕はすぐさま、君を柳の枝でぶつんだ。

相手 柳の枝。

ブリキ そろ、柳の枝。
柳の枝は、よくしなるしね。

相手 それは、どれくらいの強さで。

ブリキ どれくらいの強さ。

相手 そろ。
僕は痛いのに弱いんだ。

ブリキ 誰だつて、痛いのは弱いよ。
でもそつか、君は悪寒がしたら、会社を早退するんだもんね。

相手 それは、本当に仕事ができないくらいの悪寒だつたんだよ。

ブリキ そろだね。
こんな感じかな。

ブリキ、柳の枝で、相手を全力でぶつマイム

相手 そんなに。

それは相当痛いね。

ブリキ どれくらいの痛みかは、個人差があると思うんだけど、
とりあえず、君の肌、みみずばれができるくらいだと思つてくれれば良いよ。

相手 そんなに。

ブリキ しょうがないだろ。
そろしろ。つて僕も言われてるんだから。

相手 誰に。
誰に言われてるんだ。

ブリキ 僕が、誰にそつ言われてるかは、君には関係ないことだし、言つちやいけないことになつてる。

相手 言つたら、どうなるの。

ブリキ 言つたら、それこそ僕が指導されるんだよ。
僕だつて、できることなら、君を指導したくないし、だから君は、余計なことを考えないよりにしてくれよ。

相手 ∴

ブリキ で、お腹はすいてるの。

相手 ああ、そろだね。
不思議なことに、そんなにはすいてないかな。

ブリキ そろか。君を丸々と太らせることも、僕の仕事なんだけども。

まあ、でも、すいてないなら、しょうがないね。

お腹がすいたら、いつでも言つてね。

今日は、とびつきりカラフルなテントウムシを捕まえることができたから、最高に美味しい食事を用意できるよ。

相手 テントウムシ。

ブリキ そう、ただのテントウムシじゃないよ。とびつきりカラフルなテントウムシ。

相手 テントウムシを食べるのかい。

ブリキ もちろん食べるよ。

相手 本当に。

ブリキ どうしたの。

君はテントウムシを食べないの。

相手 食べたことないよ。

美味しいのかい。

ブリキ 美味いか美味くないかと言うより、ただただ最高だよ。

カラフルなテントウムシほど最高なんだよ。

相手 そうなんだ。

あいにく、僕にはテントウムシを食べる文化がないから、君の言っていることを理解できないけど。

ブリキ テントウムシを食べるのは、文化なのかい。

相手 いや、分かんないけど。

ブリキ 文化だったら、それは勝手に人が造ったり、想像した物を、価値があるとする
つてことだろ。

なんで、自分の感覚を信じないんだい。

相手 ∴

ブリキ とにかく、お腹がすいたら、すぐに言つてよ。

とびつきりカラフルなテントウムシを、すぐにソテーするからさ。

相手 ∴ありがとう。

ブリキ こう見えても、料理には自信があるんだ。

相手 うん。

一つ聞いて良いかい。

ブリキ 聞いても良いけど、それは指導をしなければいけないことじゃないよね。

僕だって、できることなら、君を指導したくないんだ。

相手 大丈夫だ思う。

ブリキ じゃあ、言つて。

相手 テントウムシを食べて、お腹を壊したりはしないのかい。

僕は、テントウムシを食べたことが無いからさ。

ブリキ テントウムシを食べて、お腹を壊した人の話なんて、聞いたことがないよ。

君は何を恐れているんだい。

て言うか、君はそんな風に、常に何かに怯えているのかい。

相手 ∴

そうかもしれない。

僕は、常に、何かに怯えて生きてきたのかもしれない。

::

ブリキ そうか。

君は、常に何かに怯えてきたのか。

それは本当に辛いことだね。

でもそれは、君自身が招いたことだし、僕にはどうすることもできないよ。

相手 ::

ブリキ どうしたの。

相手 寒い。

ブリキ 大丈夫。

相手 寒い。

ブリキ 落ち着いて。

寒い。

また悪寒がするのかい。

相手 寒い。

ブリキ 落ち着いて。

誰も君を責めてないんだから。

相手 寒い。

ブリキ 大丈夫。

とにかく落ち着くんだ。

ブリキ、おろおろ

ブリキ 気持ちを落ち着けて、眠るんだ。

そうすれば、きっと、悪寒も無くなるから。

相手 寒い。

ブリキ ああゝ

照明、ゆつくりと暗転

音楽

照明ゆつくりと舞台全体

ブリキ、相手の近くで見ている

相手が目を覚まし、軽く驚いて、後ずさりする

その後、平静を保ち

ブリキ 良かった。

ようやく目を覚ました。

相手 　　：
ブリキ 大丈夫かい。
相手 　　そうか。
　　　　　僕は、また、悪寒がして、眠ってしまったんだ。
ブリキ 　　そうだね。
　　　　　君は、突然、悪寒に襲われて、全てをシャットアウトするかのように、眠りについたね。
相手 　　：
ブリキ 　　：
相手 　　今回、僕は、どれ位、寝ていたんだい。
ブリキ 　　君は、丸4日間、寝ていたよ。
相手 　　そんなにか。
ブリキ 　　そんなにだね。
相手 　　僕は結局、かれこれ1週間も寝ているね。
ブリキ 　　そうだね。
　　　　　君は、かれこれ1週間、寝ているね。
相手 　　寝ている間に、少し冷静になれたよ。
ブリキ 　　人は、寝ると冷静になれるらしいね。
相手 　　そんなことを今まで思ったことは無いけど、どうやらそうらしいね。
　　　　　僕は、寝ている間に、色んなことに対して冷静になれたよ。
ブリキ 　　冷静であることは、良いことだと思うよ。
相手 　　ありがとう。
　　　　　：
　　　　　思っただ。
　　　　　と言うより、まず最初に疑問に思っぐきだつただけど、
ブリキ 　　何だい。
相手 　　君は誰なんだい。
ブリキ 　　僕が誰かって。
相手 　　そうなんだ。
　　　　　まず最初に思わなきゃいけないことなんだけど、
ブリキ 　　そうだね。
　　　　　僕が誰なのか。
　　　　　まず最初に考えることだと思うけど、
　　　　　君はいつだって、まず最初に自分のことを考えてきたらろ。
相手 　　そうかもしれない。
ブリキ 　　ここはどこ。
　　　　　何で、僕はここにいるの。
　　　　　何で、僕は捕まったの。
　　　　　何で、僕は生れたの。
　　　　　何で、僕は生きていかなければいけないの。
　　　　　何で、僕は上手く生きていけないの。

何で、僕は、
何で、僕は、
何で、僕は、

::

君はいつだって、君のことだけを考えている。

相手 恥ずかしいね。

ブリキ 恥ずかしくは無いよ。

みんなそうだよ。

相手 でも思ったんだ。

ブリキ 僕が誰か。

相手 そう。

君は誰なんだい。

ブリキ その問いに僕が答える前に聞くけど、

それって、意味のあることだと思う。

相手 ::

ブリキ 僕が誰か。

そのことに、君は意味を見出せるかい。

相手 分からない。

でも、意味があるかどうかより、絶対に聞く必要があると僕は思っている。

ブリキ なるほど。

意味は無くても、必要があると。

相手 そうだね。

ブリキ 安心したよ。

必要であるなら、僕は答えられる。

相手 君は誰なんだい。

ブリキ 僕は、君だよ。

相手 君は、僕。

ブリキ 違うよ。

僕は君だけど。

君は僕じゃない。

相手 ::

ブリキ 僕は君だよ。

相手 でも、僕は君じゃない。

ブリキ そう。

君は僕じゃない。

相手 ::

ブリキ 残念ながら、君も感じてはいるだろうけど

この世に、イコールのものなんて存在しないんだ。

相手 ::

ブリキ 僕の言っていることが分かるかい。

相手 何となく。
ブリキ 僕は君だけど、君は僕じゃない。
相手 じゃあ、僕は誰なんだろう。
ブリキ 君は君だよ。
相手 ……
ブリキ 納得してくれたかい。
相手 なんとなく。
ブリキ 良かった。
相手 もう一つ思ったことがあるんだ。
ブリキ 君は寝ている間に、色んなことを思っただね。
相手 そうかもしれない。
ブリキ 人は、寝ている間に、生きているつてのは本当かもしれないね。
相手 寝ている間に生きている。
ブリキ そう。
誰かが言ってたんだ。
今は今なのか。
君が思ってる今は、夢なんじゃないのかって。
相手 誰が言ってたんだい。
ブリキ 誰かは忘れたけど、さつきまで僕が会ってた人。
相手 ……
ブリキ で、何を思っただい。
相手 そうだ。
君は、何でそんな恰好をしてるんだい。
寒くないの。
ブリキ 僕がなんでこんな恰好をしてるか。
僕は生まれた時から、この姿だよ。
寒いも何も、寒くてもこの姿だし、暑くてもこの姿だし、
この姿でいることに、何の疑いもないよ。
相手 僕には君が、とても寒そうに見えるんだよ。
ブリキ 僕がこの姿でいるのは、そう望まれてるからだよ。
相手 それは、どう望まれてるの。
ブリキ そうだね。
僕が叩かれる時に、一番痛いつて感じるように、上半身は裸なんだ。
相手 それは辛いことだね。
ブリキ でも、誰かが僕を叩く時、叩いてる人は、僕に痛がつて欲しいわけだろ。
相手 そうかもしれない。
ブリキ 僕が痛くなかったら、叩いてる人は、つまらない。
相手 そうかもしれない。
ブリキ だから、僕は、叩く人が望むように、一番痛がるように、裸なんだよ。
相手 やさしいね。

ブリキ やさしいわけじゃないよ。
僕はそのために存在するってことだけさ。

相手 …

ブリキ ところで
お腹はすかないかい。

相手 不思議なことに、全然すいてないよ。

ブリキ そうか。
僕は、君を丸々と太らせることも、仕事なんだけども。

相手 それは、僕を食べるため。

ブリキ 僕は君を食べないよ。
僕は、哺乳類の肉を食べない。

相手 じゃあ、誰が僕を食べるの。

ブリキ 誰が君を食べるか。
もはや君は、それを分かっているんじゃないのかい。

相手 そうだね。
薄々だけど、分かっていると思う。

ブリキ …

相手 僕と一緒にここから逃げないかい。

ブリキ、酷く震える。

ブリキ 今何て言った。

相手 僕と一緒にここから逃げないかい。

ブリキ やめろ。

相手 僕と一緒に、ここから逃げよう。

ブリキ やめろ。
ここから逃げることはできないし、僕はここから出ていけない。

相手 何で。

ブリキ 何でもへちまも無いよ。
僕はここにいたいんだよ。
それに、君も知ってるだろう、ここからは逃げられないって。

相手 分かっているけど、

ブリキ 逃げたらどうなるかも分かっているだろう。

相手 分かっている。

ブリキ 前に逃げた君は、あんなに酷い目にあつたじゃないか。

相手 酷い目にあつた。

ブリキ だつたら何で逃げるんだよ。

相手 それしかないから。

ブリキ 君はここで、美味しい食事をとって、丸々太れば良いんだよ。

相手 でもそれは、食べられるためだろう。

ブリキ 美味しいテントウムシがあるんだよ。
星が7つある、とつてもカラフルなテントウムシがあるんだよ。

相手 一緒に逃げよう。
外の世界を見せてあげるから。

ブリキ 外の世界なんて見たくないし、外の世界なんて無い。
ここは、ここではない。

相手 逃げよう。

ブリキ 無理だよ。
逃げられないよ。
また食べられるだけだよ。

相手 僕は何回食べられたんだい。

ブリキ わからないよ。
君が何回食べられたかなんて。
ただ、僕はもう、君が食べられるのを見たくないんだ。

相手 ごめんよ。
僕は逃げる。

ブリキ 駄目だよ。

相手 逃げる。

ブリキ 待つて。
待つて。
待つてく。

照明、ゆっくりと暗転

音楽

ブリキ、ロウソクを持って、最初の様に登場

照明、ゆっくりと舞台全体

ブリキ 目が覚めたみたいだね。
こんにちは。

ブリキ、ロウソクの火を吹き消す

照明、暗転

音楽